

平成 21 年 6 月 2 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18510240

研究課題名（和文） ジェンダー・フリー保育の効果に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Effects of Gender Free Child-Care

研究代表者

青野 篤子(AONO ATSUKO)

福山大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70202489

研究成果の概要：本研究は、保育者・保護者のジェンダー観を探ること、ジェンダー・フリー・プログラムの導入と男性保育者の参入の点からジェンダー・フリー保育の効果を検討することを目的とした。その結果、保育者と親は男女平等を希望しながらも保育の有りようには関心が薄いこと、男女児の不得意分野に対する働きかけが効果的であること、男性保育者には従来の伝統的性役割を脱却した新たな役割とアイデンティティが模索されていることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 1,300,000 | 0 | 1,300,000 |
| 2007年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2008年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,000,000 | 510,000 | 3,510,000 |

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：ジェンダー、ジェンダー・フリー、ジェンダー・フリー教育、ジェンダー・フリー保育、男女平等、隠れたカリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) ジェンダー・フリー教育（保育）に対するバッシングが高まる中、ジェンダー概念やジェンダー・フリー教育（保育）の取り組みについての正しい理解が求められていた。そこで、保育現場の現状を把握し、ジェンダー・フリー保育を推進するための具体的な方策検討する必要がある。

(2) 2003～2005年度の科学研究費補助金による研究（課題番号 15510216、研究代表者金子省子）では、ジェンダー・フリー保育の

進展状況を調査したが、現状把握にとどまっていたため、具体的なプログラムの開発とその導入による効果の査定、現場との交流やフィードバックによるアクション・リサーチが必要だと考えられた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ジェンダー・フリー保育の導入による影響を、保育の推進役である保育者と保護者、またその受け手である子どもの双方に見られる意識や活動の変化の点からとらえることを目的とした。

(2) 具体的には、ジェンダー・フリー保育の効果を検証するため、園の実態に即したプログラムを開発し、それを実際に導入することにより、園児の活動内容や作品の変化をとらえる。また、保育者・保護者に研究のフィードバックを行うことにより、ジェンダー・フリー保育に対する情報提供を行う。

3. 研究の方法

(1) ジェンダー・フリー保育の導入・推進に関心をもつ協力園を募り、事前調査として、保育環境と保育内容の現状を観察・記録した。

(2) 保育者・保護者のジェンダー観と保育への期待を明らかにするために、協力園の保育者 94 名・保護者 428 名に対して質問紙調査を実施した。父親の回答がごくわずかだったので、母親のみを分析対象とした。

(3) 男性保育者 6 名に対するインタビュー調査（半構造化面接）を実施し、グラウンデッド・セオリーにより、男性保育者の意識構造について理論化を試みた。

(4) 園の環境や園児への関わり方に潜むジェンダー・バイアス（隠れたカリキュラム）を観察により明らかにし、それを園にフィードバックし、意見交換を行った。

(5) 園と協力して描画とサッカー遊びに関するジェンダー・フリー・プログラムを考案して一定期間実施した。プログラム導入前後の園児の嗜好性と分析することにより、プログラムの効果を査定した。

①F 市内の T 保育園の年長の女兒 12 名、男児 15 名を対象に描画プログラムを実施した。女性的・男性的画像の両方を含む塗り絵、一本の木から自由に連想して描く課題、新種の花を描く課題、未来の車を描く課題、青色だけを使用する自由画課題、ピンク色だけを使用する自由画課題を日常保育の描画の時間に保育者により順次導入した。

②F 市内の M 幼稚園の土曜保育に参加している 5 歳児クラスの女兒 8 名、男児 29 名を対象として、幼児用指導ガイドライン（JFA、2000）を参考に独自の指導案を作成し、大学生がファシリテーターとなり、女兒の積極的参加を促す働きかけを行った。

(6) 研究成果や保育とジェンダーに関する今日的な話題について、適宜、保育者・保護者に「研究室だより」という形で情報提供を行った。

4. 研究成果

(1) 大学が所在する F 市内の法人立幼稚園・保育所 64 カ所に協力の要請を求める手紙を郵

送したところ、上記のプログラムの導入までのすべての部分に協力するという回答があったのは 2 幼稚園・5 保育所であったが、観察や調査ならば受け入れるという回答は多数あり、現場の関心の高さが伺われた。一方、公立の幼稚園・保育所は行政窓口での依頼となったが、一部の園で特別なプログラムを実施することは問題があるとの回答であり、それ以上の協力を求めることは断念した。協力園の園長を対象とした予備調査から、各園ともにジェンダー・フリー保育には関心があるが、具体的なプログラムや方策はまだ実施していないということが判明した。

(2) 保育者・保護者への意識調査から、ジェンダーの社会的構築性に対して理解され、ジェンダーにとらわれないしつけや社会における男女平等は是認されていると言えた。たとえば、「ジェンダー」の意味についての自由回答では、「男女の違い」や「性差」という単純な性差の意味ではなく、「文化的・社会的な性差」、「文化的・社会的な男女の違い」などといった社会的性差の意味、さらに「女性差別」、「男・女という考え方」、「女性はこうであるべき、男性はこうであるべき」という考え方のように自分のことばとして表現したのも見られ、いわば「ジェンダーのしろうと理論」の妥当性が検証された。一方、園の隠れたカリキュラムについての気づきは薄く、保育の役割については期待が大きいとは言えなかった。男性保育者の参入は歓迎されていた。

(3) 男性保育者に対するインタビュー調査から、男性保育者は少数派であるがゆえに、保育者としてのアイデンティティや女性保育者との関係作りに不確かさを感じている。しかし、保育の経験を積むにつれて、自分らしさをいかした保育に目覚め女性保育者と対等にに関わり、伝統的な保育のあり方を変え

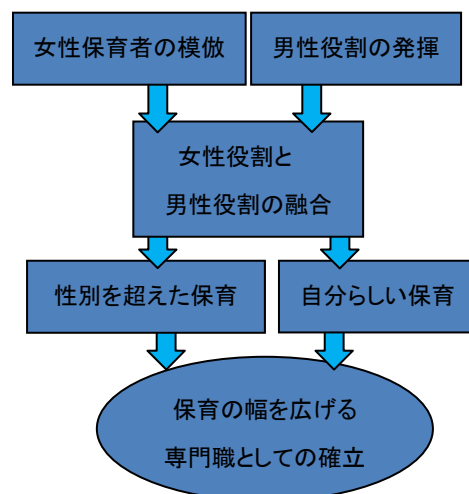


図 1 男性保育者の役割構造

る力を発揮することが示唆された(図1)。また、保育者と保護者の意識調査からは、男性保育者の参入により、男性でも乳児の世話ができるなど、男性役割の再評価を含む周囲の意識変容が起こる可能性が示唆された。

(4)ジェンダー・フリー・プログラムの導入により、自由画で男女児が使用するモチーフと色彩がより多彩となった(図2、図3)。また、女兒のサッカーに対する好みが高まった(図4)。「フリー」は子どもの自由な選択を前提とするが、大人が積極的に働きかける必要性を示唆している。



図2 プログラム導入後の女兒の絵



図3 プログラム導入後の男児の絵

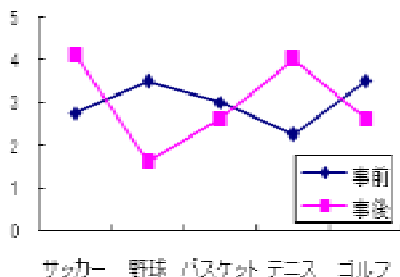


図4 サッカー経験前後の女兒の好みの変化

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 青野篤子 (2007). 男女平等とジェンダーに対する保育者の意識 福山大学人間文化学部紀要, 7, 65-79.
2. 青野篤子 (2008). ジェンダー・フリーについてのしろうと理論 福山大学こころの健康

相談室紀要, 2, 1-9. 6.

3. 青野篤子 (2008). 園の隠れたカリキュラムと保育者の意識 福山大学人間文化学部紀要, 8, 19-34.

4. 青野篤子 (2009). 男性保育者の保育職に対する意識—ジェンダー・フリー保育の観点から— 福山大学人間文化学部紀要, 9, 1-29.

〔学会発表〕(計5件)

1. 青野篤子・玉木健弘 (2007). 男性保育者に対する保護者および保育者の期待—男性保育者の存在の効果— 日本発達心理学会第18回大会(埼玉 3.24) 発表論文集, 289.

2. 青野篤子 (2007). ジェンダー・フリーについてのしろうと理論—園の保護者調査から— 日本心理学会第71回大会(東洋大学 9.20) 発表論文集, 1264.

3. 三浦さつき・松原一智・青野篤子 (2008). ジェンダーに敏感な視点を活かした描画活動プログラム実践報告 山梨県立大学保育リカレント講座(2.14) 子どもの“世界”を広げる描画活動—女の子・男の子の絵が変わる—

4. 青野篤子 (2008). 男性保育者の保育職に対する意識—ジェンダー・フリー保育の観点から— 日本グループダイナミクス学会第55回大会(広島 6.15) 発表論文集, 190.

5. 青野篤子 (2008). サッカーの経験がサッカーの好みにも及ぼす影響 日本社会心理学会第49回大会(鹿児島 11.3) 発表論文集, 660.

〔図書〕(計2件)

1. 青野篤子 (2008). ジェンダー概念の変遷 青野篤子・赤澤淳子・松並知子(編) ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 pp.307-321

2. 青野篤子 (2008). 幼児教育におけるジェンダー 柏木恵子・高橋恵子(編) 日本の男性の心理学 有斐閣 pp.74-79.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青野 篤子(AONO ATSUKO)
福山大学・人間文化学部・教授
研究者番号: 18510240

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者